2023年7月30日（日）主日朝礼拝説教

『わたしは門である』　井上隆晶牧師
詩編100篇1〜5節、ヨハネ福音書10章7〜18節

❶【神の名前】

神様は隠れているのですが、選ばれた人、例えばアブラハム、モーセ、預言者たちに現われ、ご自身のことを教えられました。それを「**啓示**」といいます。しかしすべてを現わしたり教えたのではなく、ごく僅かにしかすぎませんでした。ただイエス・キリストを通して私たちが知らなければならないことを完全に現わされました。（知らなくて良いことは現わさず、教えなかった）「**神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くの仕方で先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。…御子は神の本質の完全な現われであって…。**」（ヘブライ1：1〜3）と書かれています。
旧約聖書では神様はアブラハムに現れた時、御自分の名前を知らせませんでした。しかしモーセに現れ、彼が神の名前を聞いたとき、神様は「**わたしはある**」（出エジプト3：14）、「**わたしは主である**」（出エジプト6：3）とだけ告げました。一方新約聖書の中でキリストは様々な名前で呼ばれています。中世のある人がいくつの名前で呼ばれているかを書き出したら187あることが分かりました。有名なものは「ことば、光、門、羊飼い、羊、小羊、道、真理、命、復活、先生、医者、身代金、ぶどうの木、いのちのパン、弁護者、知恵、王、大祭司、親石、花婿…」きりがありません。教父たちは、キリストの「神性に関する名」と、「人間性に関する名」を分けていますが、4世紀の聖大バシレイオスはこのように書いています。

> ●「聖書は主キリストにただ一つの名をつけるのではなく、キリストの神性や偉大さが知られる名だけをつけるのでもない。…私たちに注がれるキリストの恵みの多様性に応じて、数知れぬ名がつけられている。あるときは牧者と呼ばれ、ある時は王と呼ばれる。また医者、花婿、道、門、泉、パン、斧、岩などとも呼ばれる。以上の名はキリストの本性を示すものではなく、キリストの働きの多様性、すなわち、ご自分が創造された人間への慈しみにより、願い求める人々の個々の必要性に応じてなされる救いの業を指し示している。」

つまり、**これらの名前の多さは、キリストの働きの豊かさと深い愛を現わしているのです。**名前をつけるということは、限定されるという事です。しかし神は限定される方ではありません。無限なる方は無限の名前を持ちます。その無限なる方が歴史の中で、ご自分を限定なさいました。約2000年前、ユダヤで、イエスという名をもって現れて下さったのです。私たち時間の中に生まれた限界ある人間を救うために、無限なる方が有限となって下さったのです。私たちに合わせ、屈んで下さったのです。そして無限なる方は、イエスという「**私の名によって願い**

なさい。」（ヨハネ 16：24）とおっしゃって下さいました。故に私たちは恐れることなく、「イエス様、私を憐れんでください」と祈るのです。

❷【イエス様は門である】

さてイエス様は「**わたしは羊の門である。**」（7 節）とか「**わたしは門である。**」（9 節）、「**わたしは良い羊飼いである。**」（7 節）と様々にご自分の事をいわれました。4 世紀の聖ヨハンネス・クリュソストモスはこういっています。

●「彼がわれわれを父なる神のもとへ導く時には、自らを『門』と呼び、われわれを守られる時には『羊飼い』と呼ばれる。」

イエス様は門です。何の門でしょう。天国への門です。どの国でも、入国しようとするなら門（ゲート）を通らなければなりません。外国から来た人はそのゲートで入国審査を受けます。その時パスポートをもっているかどうか、また入国にふさわしい人間かどうかが審査されます。相応しくなければ入れずに帰されます。それと同じで、天国には自分勝手に入ることは出来ません。キリストという門で入国審査を受けるのです。「**わたしを通って入る者は救われる**」とあるように、キリストを通らなければ天国に入ることはできません。他の誰か、例えば、他のメシア、教祖、自分自身によっては天国に入れないのです。

●イタリアのフィレンツェにサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂があり、その教会の隣に八角形をしたサン・ジョヴァンニ洗礼堂があります。日本語に訳すと聖ヨハネ洗礼堂です。その洗礼堂の東側にミケランジェロによって「天国の扉」と呼ばれて有名になった黄金の扉があります。10 枚のレリーフによって旧約聖書の物語が描かれているのです。さらにその洗礼堂の中に入ると、壁一面に黄金のモザイクで描かれた最後の審判のイコンがあります。洗礼堂の扉が「天国の門」と呼ばれたということは、洗礼が天国への入門であることを教えているのです。

そんな美しい扉とは違いますが、私たちの教会も「天国の扉」があります。もし、天上に行かなくても、既に地上で「天国への門」が開いているとしたらどうでしょう。イエス様は弟子たちに「**わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。**」（マタイ 16：19）といわれ、教会は天国とつながっていると言われました。故に、この場所に「天国の扉」が開いているのです。毎週の礼拝は、キリストという門を通って神の国へ入る練習をしているのです。この門を通って私たちは豊かな牧草、すなわち聖餐を通して永遠の命に与るのです。

❸【イエス様は良い羊飼いである】

さらにイエス様は「**わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。**」（11 節）と言われました。良い羊飼いと言われるからには悪い羊飼いもい

るということです。それは偽の教師、偽のメシアたちです。彼らは信者を見捨て、信者の為に犠牲を払いません。愛とは自分の大切なものを与えることです。犠牲をどれだけ払ったかで本物か、偽物かを見分けることが出来ます。私たちの主は実にご自分の命を与えて下さいました。この良い羊飼いのことは旧約聖書で預言されていました。「**主なる神はこう言われる。見よ、私は自ら自分の羊の群れを探し出し、彼らの世話をする。**」（エゼキエル 34：11）イエス様は私たちを悪魔（死）から奪い返し、私たちをその肩に担いで父なる神の元へ、すなわち天の国へ連れて行って下さいます。「**わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。**」（14 節）とあるように、私たちは他の者にはついて行きません。イエス様の愛を知っているからです。
ヨハネの福音書 13 章 1 節に「**イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、この世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。**」という言葉が出てきます。榎本保郎牧師は「私たちがキリスト教信者である理由は、イエスが私のために十字架について死んでくださったということだけである。それよりも深いものも、浅いものもない。それが自分にとって真理であると受け取ったときに、その人は信徒である。それを受け取ることが出来ない人は…信徒ではない。」と言っています。十字架は自分のためだ、イエス様がご自分の命を捨ててまでも私を愛して下さったのだと信じるという事です。

●2 世紀のトルコのスミルナの町の主教ポリュカルポスを思い出しますね。彼は使徒ヨハネの直弟子でした。当時キリスト教は迫害されていて、彼は捕まり、信仰を捨てるように言われます。彼はとても人徳のある人で、市民にも好かれていたので総督は何とか彼を助けようと思い「一言でいいから、キリストを拒否すると言ってほしい」と頼みますが、ポリュカルポスは「私は 86 年間キリストに仕えてきましたが、彼は決して私に対して悪いことをしませんでした。どうして、私を救ってくださった私の主を冒涜することができましょうか。人は悪から善に向かうのは良いことですが、善から悪に戻るのは良くないことです。」といって殉教してゆきました。愛された人のことは裏切ることはできませんし、愛する者のためになら命を捨てても惜しいとは思わないものです。

誰かが「世の中で一人だけ私たちを裏切らない方がいる。それはキリストである。」と言ったのを思い出しますが、本当にその通りです。この世の全てが消え去っても、キリストの愛は最後まで残ります。（Ⅰコリント 13：13）キリストが命を捨てるほど私を愛されたという事、それは永遠に残ります。私たちが求めているのは完全な愛なのです。この方はそれを持っておられる。故に私たちはこの方を愛し、どこまでもついて参りたいと思います。